

平城宮内裏官衙地区北方の調査

—第579次

1 はじめに

本調査は個人住宅建設にともなう事前発掘調査である。本調査地は平城宮内裏官衙地区北方にあたり、当地の北西の調査区では平城宮の北面大垣を検出している(第23次調査)。また、内裏北外郭の調査では市庭古墳周濠の南側部分を検出し(第10・11・13・20次調査)、平城宮北辺地域の調査では周濠・外周濠の西北部分を検出した(第126次調査)。後者の調査では外周濠が苑池として奈良時代に再利用されていることをあきらかにした。本調査地は市庭古墳周濠SG2150の西側肩部の想定位置に該当する。調査区は南北4m、東西9mの計36m²、調査期間は2016年10月27日から11月7日である。

2 基本層序

現地表は西から東、および北から南にかけてゆるやかに傾斜している。層序は地表から表土が約70cm、現代の造成土が約15cm、整地土(古墳堤相当面)である。古墳周濠は整地土から落ち込む。

3 検出遺構・出土遺物

市庭古墳周濠SG2150 調査区東部にて市庭古墳の周濠と考えられる落込みを南北約2.2m分、東西約2.1m分検出し、深さは約40cmまで確認した。市庭古墳周濠の西北部分の調査(第126次調査)で検出している葺石やその抜取痕跡は確認できなかった。周濠埋土は平面および土層断面で落ち込みを確認したのみで、深くなることが予想されたため完掘はおこなっていない。

土坑SK19950～19954 周濠埋土面、および古墳の外堤相当面にて土坑5基を検出した。いずれも組み合わず、その性格は不明である。

遺物はわずかに土器片が出土したのみで、調査面積に比して出土遺物は少ない。

4 まとめ

今回の調査では、市庭古墳の周濠西側肩部に相当する落込みを確認した。ただし、埋土から遺物は出土せず、

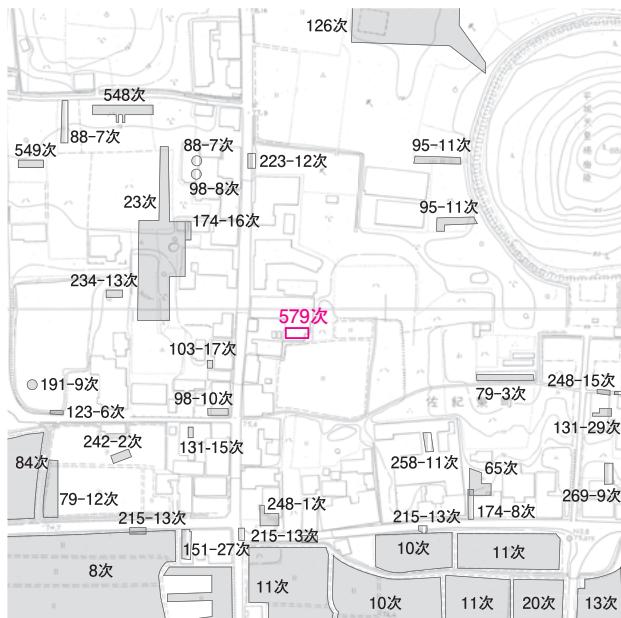


図190 第579次調査区位置図 1:3000

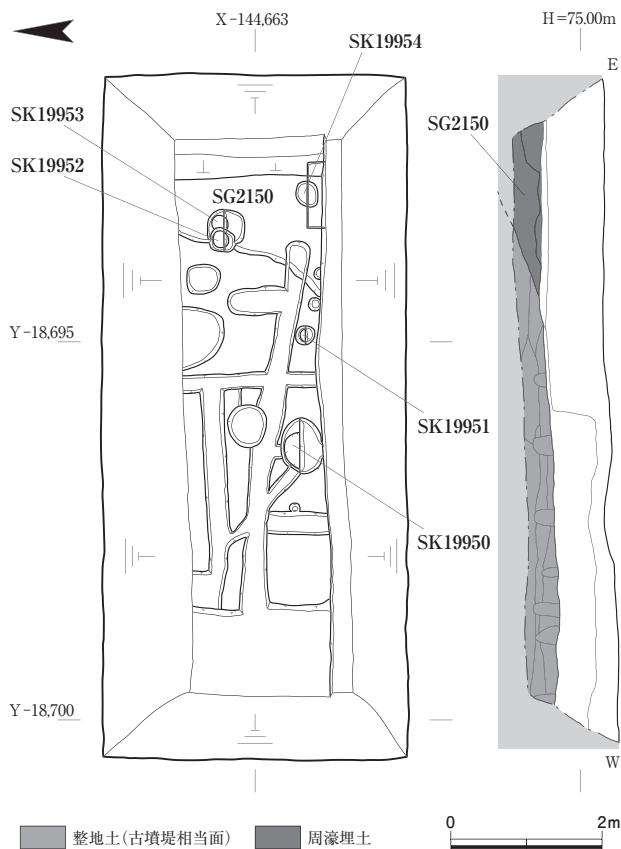


図191 第579次調査遺構図・土層図 1:100

周濠埋立ての時期は特定できなかった。また、市庭古墳周濠北西部分の調査で検出している葺石やその抜取痕跡はみられなかった。周濠埋土面、および古墳の外堤相当面にて土坑5基を確認したが、組み合うものではなく、出土遺物をともなわないと時期や性格は不明である。当該地区の奈良時代以降の空間利用の様相、および市庭古墳周濠の規模・構造については今後の周辺調査の成果に期待したい。

(丹羽崇史)